

平和の旗を高く掲げて

——名大平和憲章の制定に立ち会う——

佐々木 享

わたくしは 1987 年の「名古屋大学平和憲章」の制定に名大職組の委員長として立ち会う光栄に浴したので、ここでは『平和への学問の道——ドキュメント名古屋大学平和憲章』には書かれなかったことを記しておく。

1986 年に職組の委員長就任後間もなく、ことしは「名古屋大学平和憲章」の確定をめざすと聞いてわたくしは驚いた。数年にわたる運動の積み上げがあるとはいえ、制定を宣言するまでにはまだ乗り越えるべき隘路がたくさんあるように思われたからである。

隘路を乗り越えて制定？

実際、86 年 11 月の案文確定のための集会では原案の不充分さを衝く議論が百出して、收拾がつきかねる状況だった。提起された意見は正論で、理解できないわけではなかったが、事務局にそっと聞いてみたら、署名用紙はすでに何万枚も印刷済みだし、この機会を逃したら宣言は大幅に遅れるとのこと。ところが司会者（学生代表）は、時間がきたからと案文確定を宣言しないまま閉会しようとした。わたくしは驚いて、決定的瞬間を逃してはならないと二度三度マイクをとって、参加した人びとに案文確定への賛同を訴えた。集まっていた人びとは血相を変えて訴える声に、圧倒的な支持の拍手で応えて下さった。

妨害者と闘う

案文確定集会の準備過程で、悪意の妨害者が現れることを予想していなかったことも驚きの一つだった。職組書記局に相談すると、「私たちがからだを張って排除する」と言ってくれたので、わたくしは前述の集会の場に臨んだ。案の定、いわゆる革マルの諸君が妨害に現れ、塩田氏ら書記局の人たちが会場入り口で押しとどめたのだった。

理想は高く——過半数の署名をめざして

大学構成員の過半数の署名で制定宣言したい、と言っているのを聞いて、わたくしは、理想を語るのはよいが、正気なのかと言いたい気持ちだった。最大多数を占めるのは学生諸君だが、若干の学部自治会は崩壊状況にあり、その結集に不安があったからである。

署名活動を始めてしまったからには、学生数より相対的には少ない職員ががんばる以外にないと腹を決めた。そのためにわたくしは、教職員はそれぞれの職場で構成員の過半数の署名を集め、その基礎のうえにがんばり抜いて全構成員の過半数を達成しようと執行委員会で訴え、また可能な限り各職場をまわった。

教職員はほんとうによくがんばった。ある職場の人が、全員署名をめざして努力

したがどうしても署名してくれない人が 1 人いると泣きながら報告してくれた姿をわたくしは忘れることができない。1 月の旗開きの集会を全支部過半数達成で迎えようと訴えたが、当日までに工学部だけが過半数に僅かに及ばなかった。それからの工学部支部の人たちのがんばりはすさまじく、数日のちに支部目標を達成した。それから間もなく、署名者は全学構成員の過半数を超えた。

蛇足——わたくしの光栄・職組の光栄

平和憲章制定宣言集会の夜には、多数の人が豊田講堂につめかけた。テレビが 4 局もきたためか、田村さんが宣言を読み上げ始めた時、講堂のライトが消えるハプニングがあった。再び点灯した時に壇上で挨拶していたのは委員長のわたくしで、その姿は『名古屋大学五十年史 通史二』の扉写真を飾っている。これは職組の光栄というべきかも知れない。

